平成24年（2012）
11月号・Nobembro

五代教主作 灰釉茶盌 銘「みろくの春（別名・みちのくの春）」六盌のうちの一盌
［金竜海土・梅松館木の花桜釉］

題字 出口直日

通巻 第524号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 浅田秋彦
〒110-0008
東京都台東区池之端2-1-44
TEL 03-3821-3701
（IP）050-5510-9502
FAX 03-3821-5283
URL http://oomoto-tokyo.com
E-mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

むつかしき話をやめよ大神の
まことの道はたやすきが道

出口王仁三郎聖師

関東教区教勢拡大に向けて

関東教区特派宣伝使　大久保　良

天恩の郷にひびかう槌音に聖師様の声聞く神教伝えよと

このお歌は、世界への宣教センターとして、装いを新たにした亀岡天恩郷のご造営の最中に教主さまがお詠みになられたものです。このお歌に、神教宣布に対する教主さまの並々ならぬご決意と覚悟を拝察し、聖師さまの『大本の宣伝使や信者は世界の人たちが一日も早く神の御心に目ざめさしていただくよう日夜に宣伝につとめ励まねば、神さまに申しわけがない』とのお言葉と同意義であると感じさせていただいております。

また、神教宣布なくして、みろくの世の実現は絶対にありえないと思わせていただくところでございます。

神教殿での大道場講座、東京宣教センター主催の大本公開講座、常設対外講座等は立派な神教宣布活動であることは申すまでもありません。しかし、一歩目を地方機関に向けたとき、神の家（本苑・分苑・分所・支部等）から、どれだけの神教宣布活動が行われているでしょうか。神の家の大事な使命である、「教義をひろめ信徒を教化育成する」部分をもっと強化していかなくては、教御祖さまのみこころには叶っていないとの感を深くしております。

先日の、東京宣教センターでの主会長連絡会議で、分所・支部主催による神教宣布活動（生きがい講座や大本紹介講座）の開催、信徒へのお世話活動（組活動の充実）、主会の本苑・分苑化の三つを、関東教区教勢拡大への必要事項として提言させていただきました。これらは、現在までの特派経験から他教区での教勢拡大にも当てはまっていると感じております。

立派な建物は、両聖地、東京と既に建ち上がりました、次は私たち宣伝使、信徒が、教主さまのご教示に従い、自らが奮い立ち、み教を学び、実践につとめて神さまのお光を頂き、誠意と親切と忍耐の限りを尽くして、信仰の歓びを家の内に向かって深く、外に向かって広くお伝えすることこそ神教宣布であり、みろくの世実現への最も近い道であると確信しております。

「出口なお・出口王仁三郎の世界を語る」より

芸術は宗教の母なり

―宗教即芸術即生活―

講師 浅田秋彦（あさだ ときひこ）
（東京宣教センター長）

大芸術者である神

『芸術は宗教の母なり』とは、大本の教祖・出口王仁三郎の教えです。

大本では、この教えを規定にして、独特の芸術と宗教の一元論を説き、芸術である美から神を感得する道を示しています。

そしてそれが大本の芸術観の基となっていて、歴代の教主・教主補が優れた芸術作品を創りました。

しかし元来は、世界においても宗教は芸術の母体でした。キリスト教の教会、仏教の寺院といった建造物、また身にまとう装束や装飾品などは、常に芸術と共存していました。

また昔の人々は、太陽や月、山岳、海洋などの大自然の力を神と拝し、畏れ、祈り、人生を捧げてきました。

つまり宗教は学問、道徳、芸術など一切を支配するほどの力を持っていたのです。

しかし、哲学者デカルトや科学者ニュートンといった近代科学思想が十七世紀から十八世紀にかけて広まり、大きな変化が起こります。人間は自分の知恵や知識で世の中を動かせるという考えが強くなって、宗教を押しのけました。勃興（ぼっこう）した近代科学思想と宗教は別々の道を歩み、やがて政治や学問、道徳、芸術などすべてが宗教から離れていく時代になってしまったのです。

それぞれの技術が高まる反面、これは精神的な面が失われていくことでもあります。

広大無辺の大宇宙を創造された神は大芸術者であります。天地を創ったエネルギーが芸術の源であり、その偉大な力によって創られた天地の森羅万象は、いずれも神の芸術的産物なのです。

自然が神の摂理によって創られた芸術であるならば、芸術もまた神の摂理によって創られねばならず、本当の芸術とは神の力を借りなければできないということです。

多くの芸術家は、技能的な面は非常に優れています。しかし最後の最後に素晴らしいものを生み出すところは、単なる技術ではなく、大自然という芸術者の神の心に触れ、神と共に生きた時に、本当の芸術が生まれるのです。

大本の芸術が世界中のどこを探してもないものであるのは、歴代の教主が神と共に悦楽し生きて、神と共に動かんとする心で、芸術を創造してきたからです。

芸術を通して神と一つに

大本では、宗教と芸術はその働きにおいて、一致していると教えられています。いずれも神の懐へ入っていく道なのです。それと同時に宗教と生活と芸術の三つが一体化することを説き、芸術が日常生活と一体となったあり方を理想としました。

真の芸術とは、宗教と芸術を両手に携え、そのいずれも実生活の中に生かして、芸術を通して人間の心が向上していくことです。人間性が高まらないような芸術では意味がありません。

茶道を習っていても、道具類や着物にお金を掛けたり、競い合ったり、外見的なことに心を奪われるのではなく、芸術を通して、神さまと一致して、生活に生かしていくのです。

それを実践したのが王仁三郎であり、歴代教主・教主補もまた陶芸や書画、織物、茶道などいろいろな形で、芸術をつくり上げていきました。

歴代教主・教主補の取り組み

王仁三郎は、昭和十年の第二次大本事件により六年八ヵ月の間、未決監の生活を強いられました。この間、茶盌のイメージを描いたとされています。

昭和十九年十二月に茶盌作りを再開すると、ここから一年三ヵ月の間に三〇〇〇個あまりの「耀盌（ようわん）」を生みだしました。その様子は『おのが生命を吹き込むような茶盌づくりである』と残されています。

「耀盌」の特徴は、高台脇から放射状に線が引かれていて、表面全体に竹の〝篠（ささら）〟で突いた跡があります。その一つひとつを突きながら『かんながらたまちはえませ』と魂を打ち込みました。

また一番に目を引かれるのが、それまでの茶盌のイメージを覆す〝色〟にあります。

赤、青、黄など限りなく鮮やかな色彩のとても斬新な茶盌で、王仁三郎は天国の世界をイメージして一盌一盌を創造していったのです。

作られた直後は誰にも評価されませんでしたが、その後陶芸評論家の加藤義一郎氏により、その色彩と姿、品格が認められ「耀盌顕現」と題して、専門誌に発表されました。

二代教主出口すみこは王仁三郎の妻にあたります。

すみこは、幼少から極貧の家庭で育ち、学校には通っていませんでした。字も習ったことがないので、一見すると子どもが書いたような字に見えます。

しかし、字をまったく習っていないからこその、神さまの御心に添った純粋で天真爛漫な字を書きました。

書道家の稲垣黄鶴（こうかく）氏は、すみこの書を「今までの既成の書法、理屈にも当てはまらない。あえて言葉にするなら、霊筆とでも言うほかがない」と絶賛しました。

また書、絵画、陶芸に精通し、美食家としても著名であった北大路魯山人は、すみこの書に見入り「その字たるや実に天真爛漫、スケールが大きくて自由自在、こんな字を書く人なら会ってみたい」と実際に面会に訪れるほどでした。

三代教主出口直日は芸術をたしなむだけでなく、多方面に才能を持っておられました。それを大本の教風に織り込まれ、信徒にも信仰だけではなく、芸術を学び、真剣に生活をする姿を大本の教風とされました。

※細く割った竹を束ねたもので、長さは約30㎝。民俗芸能の楽器やタワシとしても用いられた。

また非常に多芸多才な方で、短歌から陶芸、能楽、茶道、絵画とあらゆる芸術を趣味の枠を超えて、生活の中で熱心に取り組まれました。『信仰即芸術即生活』の教えを実践しました。

人間国宝で陶芸家の加藤土師萌（はじめ）氏は、直日の作品を「何という楽しい作品でしょう、一つ一つを本当に楽しんでおられる、私たち専門家には、とてもこのような作品は作れません」と評価されています。

理屈や概念、知識を越えて、本当に悠々とした作品を作っているのが三代教主です。

三代教主補出口日出麿は、主に書や画を書かれました。力強く男性的な線の中にも温かみがあり、人の心を清々しくさせていただけるような作品です。

書家の綾村坦園（たんえん）氏は「書や画にみられる空間の見事さは、比較するものがないほどすばらしい。また、磨き上げられた墨線のうつくしさも比類がない。しかもそれが実に温かく、生命線にあふれている。実に透き通った、仙味をおびた、一つの厳しい世界が出ている。師の書の線は、あくまでも男性的であり、決定的なぎりぎりの線を示されておられる」と評しました。

四代教主出口聖子も、機織、作陶、能楽など、さまざまな芸術に触れられました。また植物への造詣が深く、植物学者である村田源氏は「植物の生き方の中に信仰を感じ、植物に対する慈しみの心を持っておられた」と語りました。

現在の五代教主出口紅の時代になり、『信仰即生活即芸術』の型となる「つる山みろく村」が聖地・梅松苑（京都府綾部市）に開設しました。

この「つる山みろく村」には、窯芸道場、織工房、有機無農薬栽培の菜園が設置されています。特に織物は大本で重要な意味があります。「機の経緯（じょうい）」といって、〝タテとヨコ〟の糸を織りなすことにより、神業が動いているという教えです。

教主はここで陶芸、機織などを行い、歴代教主の芸術と教えを継承し、実践しています。

歴代の教主・教主補は、その時々に神のみ心を仰ぎ、さらに何事にもとらわれず神と一体化して作品を作っておられることが、他の専門家との違いではないかと思います。

その独特の芸術観が茶盌や書画、いろいろなものに表れています。

海外作品展へ

一九七二年から三年三カ月にわたり、欧米六ヵ国十三都市において「出口王仁三郎とその一門の作品展」が開催されました。

きっかけはパリのセルヌスキー美術館に、教団の職員が耀盌の写真を持って、これを美術館で展示してほしいと依頼したことに始まります。

日本では全く無名の作品です。当然、美術館で展示出来るわけもありません。しかし、その耀盌の写真に心を動かされた館長は、自分の目で確かめたいと、大本の聖地である天恩郷に来られることになりました。

昭和四十六年、聖地・天恩郷（京都府亀岡市）を訪れたセルヌスキー美術館のブァディム・エリセエフ館長は、出口一門の作品を目の当たりにし「最も日本的な作品の香気と、信仰と一体となった芸術活動から生み出された。今日世界において他に類を見ない精神的に高い次元の芸術」と評価し、作品展開催が決定します。

高く評価されたのは、大本芸術の純粋な日本の美と、宇宙創造の原点に帰ったような、信仰と芸術とが渾然一体化した内なる美の高さにあったのではないでしょうか。

パリの作品展は多くの新聞にも取り上げられ、話題となりました。その後フランス、イギリス、オランダ、ベルギーからも開催要請を受け、最終的にヨーロッパ八会場での開催となりました。

また各会場では、教団職員や信徒によるお茶席、書道教室なども催されました。

ただ単に作品を展示したのではなく、参観者に日本の伝統芸術と文化を紹介したことも、海外では非常に評価されたのです。

エリセエフ館長は、「ヨーロッパは十八世紀の理性主義、啓蒙運動が広がりで、人間中心的な考えが支配的となりました。その結果、文化のあらゆる部門で、信仰的態度へ移ることができなくなってしまった。その中で大本の芸術は世界にない唯一の〝インスピレーション〟によって、作品を創造していく世界を持っています」と最大限に評しました。

作品展から宗教交流へ

ヨーロッパでの作品展を終え、アメリカへ渡ると、ここで非常に画期的な出来事が起こります。企画に携わった芸術家のフレデリック・フランク氏より、この純粋な素晴らしい芸術作品の発表する場として、教会を会場としたいとの声がありました。

米国聖公会の聖ヨハネ大聖堂（ニューヨーク）が候補に選ばれ、ジェームス・パークス・モートン聖堂長も快諾したことから、会場に決まりました。

さらに驚くべきことに、作品展を開催するにあたり、一神教であるキリスト教の教会で、他宗教である大本による開催奉告の祭典が執り行れることになったのです。

作品を通じて、その奥にある神の姿を求めて、宗教交流につながったのです。

まさに『芸術は宗教の母なり』が実証された瞬間でした。

〝物と金〟からの「立替え立直し」

現代社会は未だに〝物と金〟を重視する時代ですが、欧米をはじめとする世界経済の低迷、一部の人間だけが利益を得る格差社会、人心の荒廃など、あらゆる分野が行き詰まりを見せています。

特にエネルギーの問題は、あれだけ安全と謳われてきた原子力発電が人類の生命を脅かす存在であることが明確になりました。

これからは大自然の恵みによる無尽蔵なエネルギーに移行していかなければなりません。

政治、経済、教育など、あらゆる面での改革が求められ、現代社会の根本的な変革が迫っています。

このことは現在の〝物と金〟の世の中から、精神的なルネサンス、大本で説く「心の立替え立直し」が起ころうとしているのではないかと思うのです。

芸術と宗教、この二つが心を豊かな方向へと導くものと確信しています。

またさらに、神さまの経綸は今の世の中を立替え立直して、真善美に輝く「みろくの世」の実現が迫ってきているのです。

東光苑秋季祭式講習会

東光苑秋季祭式講習会は、九二十九・三十の両日に開催され、のべ四十七人（内、一般一人）が参加した。

受講者は、初級クラスが基本動作から後取動作・正中動作・祓式行事・月次祭まで、中級クラスが大神鎮座祭・祖霊鎮祭・合祀祭・年祭まで、特別クラスが葬祭の斎主養成のための、装束着付けとしまい方や誄詞作文などをそれぞれ実習した。

なお、初級と中級クラスの内、十六人が大本祭式認定試験に臨み、二日間の実習の成果を試した。

基本作法から実習する初級クラスの皆さん

東光苑月次祭

東光苑月次祭・市杵島姫命例祭は十月十四日、午前十時三十分から、斎主・田村京子直心会東京連合会長のもと執行され、三百九十人が参拝した。

祭員は関東教区直心会の代表、少女祭員は千葉主会の武山さくらさん、なおひさん姉妹、伶人は宮咩会関東支部、大本神論拝読は鈴木花枝直心会神奈川連合会長、添釜は中村社中が担当した。

祭典後、浅田秋彦東京宣教センター長があいさつに立ち、来月執行される『開教一二〇年東光苑秋季大祭』の教主さまご臨席とりやめについて報告したほか、本年度教団方針を振り返りながら、「みろくの世の実践」の徹底を呼びかけた。

清々しく祭典にお仕えされた直心会員と少年部員の皆さん

続いて村上治道㈱「天声社」社長が、これまで隔月で実施していた神具や書籍類の出張販売を、都合により来年から六月と十二月の年二回に縮小することを報告。参拝者に理解を求めた。

直会後、「関東教区主会長連絡協議会」が八階ミーティングルームで、関東教区青松会主催の「第五回元気の出る研修会」が二階講座室で開催された。

出口なお・出口王仁三郎の世界を語る

第百十六回大本公開講座『出口なお・出口王仁三郎の世界を語る』は、十月十七日午後七時から八時三十分まで、港区新橋の航空会館において、島本光久（社）愛善みずほ会理事を講師に「今求められる食・農・環境―今こそ、お土のこころを―」と題して開催された。参加者は十五人（内、一般三人）。

多くの参加者から「有機栽培の重要性を実感した」との声が聞かれた

講座では、愛善みずほ会のPRビデオの上映にはじまり、同会の歴史や活動を紹介したほか、日本の農業の歴史、有機野菜と慣行野菜の違い、土壌の成り立ちや構造、酵素や発酵食品の効果、さらには福島県内で行われた放射性物質汚染土壌の微生物発酵処理の検証といった、多岐に渡る内容を専門的な見地から解説。「これからの日本人は、酵素を生み出すだけでなく、腸内環境を整え、自然治癒力を高める発酵食品を多く摂取することが重要であり、それにより自己免疫力の向上や腸内活性化を計り、健康な身体を保つことができる」と説いた。

第21回家庭平安祈願祭

今年で第二十一回目を迎えた家庭平安祈願祭は、十月二十日午前十時三十分から、斎主・和田桂一祭務課長のもと執行され、五十八人が参拝した。

祭典では、斎主と祭員が全国から申し込まれた五百九十四世帯の世帯主名を全て読みあげると共に、全世帯の平安と繁栄をご祈念申し上げ、続いて参拝者全員が玉串を捧奠した。

祭典後、浅田秋彦東京宣教センター長があいさつをのべ、拝金・科学万能主義の弊害、家庭を取り巻く環境の変化、さらにはいじめや不登校といった教育問題を指摘。「この世は天国の養成所であり、切磋琢磨する場所。しっかりと神さまに祈願させていただき、自らも明るく、前向きに、真剣に日々の生活を送りましょう」と呼びかけた。

なおご祈願は、十月二十六日までの一週間続けられた。

東光苑主催 祭典・行事予定

11月

4日（日）午前10時30分
開教120年大本開祖大祭遥拝祭

11日（日）午前10時30分
開教120年東光苑秋季大祭・新穀感謝祭・七五三詣り

21日（水）午後7時～8時30分
「出口なお・出口王仁三郎の世界を語る」
講題　人は何のために生きるのか
―人生にとって大切なもの―
講師　森良秀（東京宣教センター次長）

23日（金・勤労感謝の日）
全国人型おすすめ活動日

12月

9日（日）午前10時30分
東光苑月次祭・市杵島姫命例祭

16日（日）午前10時30分
開祖聖誕祭（176年）

19日（水）午後7時～8時30分
「出口なお・出口王仁三郎の世界を語る」
講題　今を幸せに生きる
―運を開く5つの鍵―
講師　浅田秋彦（東京宣教センター長）

23日（日）
全国人型おすすめ活動日

25日（火）午前10時30分
出口日出麿尊師毎年祭（21年）